

平成8年夏に、調査で訪れた大杉中町で聞いた言葉です。「〜テガッシャイ」は、小松市内でも大杉だけに使われる方言の敬語のようです。

二十一世紀を目前にして、昔ながらの方言は大きくその姿を変えようとしています。そんな中、方言は、今さまでまな形で見直されつつありますが、全国的に見ると、残念ながら北陸地方の人たちの方



「おばあちゃんもう一度、ゆっくり言ってみて」平成8年10月1日〜3日まで大杉で行われた聞き取り調査
右が加藤和夫助教授

連載
1
マタ キテガッシャイ
(また来てくださいな)

言に対する意識は、まだまだ低いようです。改めて、周りから聞こえてくる、そして自分自身が使っている方言に耳を傾けてみませんか。そこには、共通語の世界とは違った、魅力的な方言のワンダーランドが広がっています。

小さいころ、胸をワクワクさせながら親の首にまたがった肩車。この肩車、大杉では「サルブンブ」、丸山や尾小屋では「チヨンノクビ」、他にも「サルマカ、オチヨンコビ、アバッチヨ」など、小松東部だけでも実に多くの不思議な方言が聞かれます。

今月からしばらく小松の方言の話にお付き合いください。来月は、肩車も再び登場する「遊びの世界の方言」です。お楽しみに！

例言

1. 本書は平成10年4月から平成29年3月に発行された「広報こまつ」の連載をまとめたものです。
2. 本書は、原則として原文通りとしています。
3. 本書において、編集の都合上、原文に収載されていた写真の一部を省略した箇所があります。ご了承ください。

連載
4遊びの世界の方言
〈片足跳び〉

「ねえ、ケンケンしよう」
元気に片足跳びをする子供たち＝白楊幼稚園で

今回は、片足でピョンピョン跳ぶ片足跳びの方言を取り上げます。前回の〈雪渡り〉の方言が次第に忘れられつつあるのに対し、〈片足跳び〉の方言は今の若い人たちからも聞かれることが多く、最近の全国的調査では、若い世代でケンケンという言い方が全国的に広がっていることがわかっていきます。では、小松で年輩の人たちから聞かれる方言形にはどんなも

のがあるでしょう。今回も、これまでに調査を終えた小松東部を中心にみてみることにします。

まず、小松東部で広く聞かれたのはケンケンです。ケンケンは、もともと関西を中心に中国・四国の瀬戸内海側に分布する形で、〈片足跳び〉の方言としては歴史的に最も新しいと考えられているものです。小松のケンケンも、かつて関西方面から伝播し分布を広げたものに違いありません。それが、なぜか今また、全国の若い世代に受け入れられようとしているのです。

一方、ケンケンの分布と重なるように、大杉谷川下流域にはヒトンコ、シトンコ、ヒコンコ、郷谷川中・下流域にはストンコ、スットンコ、スツコンコ、ヘコンコ、さらに滓上川流域にはストンコ、スットンコのほか、ステンコ、ヒトンコ、ツコンコなど、多くの似た形が聞かれました。小松西部にもスコンコが分布するらしく、微妙に発音の違う多くの方言形が聞かれることから、どれが元の形かはわかりませんが、この類がケンケンよりも古い形であるこ

とは間違いないでしょう。

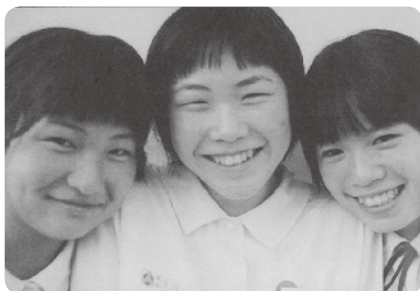
大杉本町（大杉谷川上流部）ではヒンダリコツギ・ヒンダリコツギ、丸山（大日川上流部）ではチョンパン・チョンチョンという方言形も聞かれました。

これまで3回にわたってご紹介してきた遊びの世界の方言。〈肩車〉の方言に代表されるように、比較的狭い範囲に驚くほどたくさんの方言形が聞かれました。遊びの主役である子供たちの行動範囲が狭いこともあって、この世界の方言には細かな地域差が生まれやすいのです。

次回からは、生き物に関する方言をご紹介します。

連載
5

小松のギャルは蛙だった



小松のギャルはとっても明るく元気だよ！

生き物の方言〈蛙〉〈おたまじゃくし〉

大杉町のあるお婆さんが、金沢に住む中学生の孫に電話で「きのう家の前にギャルがいっぱいおったぞ」と話したとしましよつ。その子はきつと「へえー、お婆あちゃん、ギャルなんて言葉よう知つとるねえ」と驚きの声を上げるに違いありません。

そうです。今やギャルと言えは二十歳

前後の若い女の子をさす言葉。ところが、小松の方言ではギャルは〈蛙〉のこと。これまでの調査で、〈蛙〉をギャルと言うのは、大杉（大杉本町・大杉中町・大杉町）をはじめ、大日川上流部の丸山、滓上川最上流部の中ノ峠といった山間の集落であることがわかりました。それ以外の地域では、ギャワズ（ギャオズ・ギユワズ・ギョワズ・ギワズを含む）が広く分布しています。ギャルは、カエル↓ガエル↓ギャルと変化したものと思われ、北陸地方では福井県嶺北地方の一部にも聞かれます。一方のギャワズは、カワズ↓ガワズ↓ギャワズと変化したものでしょう。

小松にはかわいいギャルがいっぱい

このように、〈蛙〉をさす方言としてはわずかに山間部でしか確認できなくなつたギャルですが、実は〈おたまじゃくし〉の方言の一部としては、小松東部の広い範囲で今なお生き続けています。金平より上流部の郷谷川流域と大杉谷川流域を中心に、「蛙+子」の意のギャルゴ（ギャル

コ・ギャルンコ・ギャンノコ・ギャツリコなどを含む）が聞かれます。また、郷谷川下流部と滓上川流域には、それらから変化したジャルゴ・ジャリコ・ジャレゴなどが聞かれます。このことは、ギャワズが分布を広げる以前に、〈蛙〉をさすギャルがこの地域に広く分布していたことを教えてくれます。

小松でかわいいギャルを見つけないと思つていた皆さん！大杉・丸山方面が穴場ですよ。

連載
6

生き物の方言〈鬼やんま〉



「ほら、こっちに来るよ」
芦城公園で昆虫採集をする博物館ジュニア友の会の子供たち

日本に住む蜻蛉とんぼの中で最も大きい「鬼やんま」。黒い体に黄色の横縞よこしまがあり、空中をスーッと直線的に、しかも悠然と飛び去る姿が人目を引くためか、小松でもさまざまな方言形が聞かれます。今回も昨年までに調査の終わった市内東部地域を中心にその方言をご紹介します。

郷谷川上流部の尾小屋にオンマトンボ・ウマトンボ、大杉谷川上流部の大杉に

ように思います。

もウマトンボが分布します。その大きさを「馬」に見立てた名でしょう。木場潟に近い本江・三谷・蓮代寺に分布するウシギリ・ウシトンボも、その大きさを「牛」に見立てて命名されたものでしょう。

郷谷川中流域の観音下から沢にかけてと、滓上川流域の原、そして今年の調査で伺った辰口町に近い里川などにはオコリトンボが分布します。「鬼やんま」の大きく恐ろしい姿が、「これを獲るとオコリ（熱病のマラリア）になる」との言い伝えを生み、オコリトンボの名となったようです。また、共通語の「鬼やんま」同様、怖い「鬼」のイメージを重ねたオニトンボが、滓上川上流部の中ノ峠から原にかけてと、大野・松岡などで聞かれました。

ほかには、ヤンマ・ヤンバ・ヤンマトンボの類が、郷谷川の下流域や滓上川の下流域にまとまって分布します。小松の「鬼やんま」の方言としては新しいものと思われます。

小松の皆さんが「鬼やんま」という蜻蛉に抱いてきたイメージや思いといったものを、その方言形から知ることができた

連載
7

生き物の方言〈かめ虫〉



「ヘクサンボって聞いたことあるよ」
博物館ジュニア友の会の子供たち

カメムシってどんな虫？

カメムシという虫の名を聞いて、皆さんはすぐにその姿を思い浮かべることができるでしょうか。普段の生活の中で、カメムシの名が話題に上ることが少ないせいか、方言の調査でこの虫の名をお聞きしようとしても、最初はどの虫のことだろうと首をかしげる方が少なくありません。

ん。ところが、「家の中によくまぎれ込んで来て、触ると嫌なおいを出す」と説明を続けていくと、「あー、ヘクサンボのことか！」といった答えがすぐに返ってきます。

触ると何とも言えない嫌なおいが…

そうです。地方の生活では今なお身近にいて、強烈なその臭気ゆえに人々の注意をひく「かめ虫」は、共通語の情報が少ないだけに、方言の共通語化が進んでいる現在でも、意外に方言名がよく生き残って使われています。

これまでの調査では、小松市に広い範囲で聞かれる代表的な呼び名は、先にも挙げたヘクサンボ（大杉谷川上流部・滓上川上流部・中ノ峠でヘッサンボ）です。「屁臭坊」の意で、東北から北陸地方にかけての所々でも聞かれる名です。ほかには、ヘクサンボの省略形のヘクサや、ヘクサンボとの関連で新しく生まれたと思われる「臭虫」の意のクサムシ（本江・蓮代寺・三谷など）、「屁こき虫」の意のヘコキムシ、ヘコキムシ（中海・軽海・荒木田・里川・大野・東

山・本江・北浅井など）などが聞かれます。ところで、小松では今のところ聞いていませんが、全国的に見ると、嫌われ者のはずの「かめ虫」に、アネコムシ（東北地方）、ジヨロムシ（「上藹虫」の意。福井・若狭地方、近畿北部、山陰地方）、オヒメサン（中国地方）などといった美しい名を献じている地方があります。美しい名で呼んでやれば、「かめ虫」はきつと機嫌をよくして嫌なおいを出さずにいてくれる。そんな素朴な祈りにも似た気持ちが生んだ呼び名だと考えられます。

“エモライ”治すおまじないは

昔は、おまじないをしました。やがて“エモライ”のことを忘れてしまい、自然と治ったものでした(笑い)。二人が向かい合わせに座り、「ワリヤ、ナンスル、わらの先を輪にして「エモライ、ムスブ」、「エモライ、ムスブナラ、シッカリムスベ」「ハイハイ、シッカリムスンダヨ」とそのわらを囲炉裏にくべました。「エモライできると、親せきに子供できる人おるんやわ」とも言いました。



生まれも育ちも符津町の北西栄作さん、雪さん夫妻
(共に喜寿の77歳)

連載
9

人の体と方言 「麦粒腫」の民間治療法

前回の〈麦粒腫〉の方言に続いて、今回は小松での〈麦粒腫の民間治療法〉(俗信)について見ることにします。

市内のほぼ全域で聞かれる代表的治療法(俗信)は、「藁の芯(ニンゴ、ヌイゴと呼ぶ)を二人で交互に言葉(うた)を唱えながら結び、それを囲炉裏の火などにくべると治る」といった内容のものです。この種の伝承は分布域が広いだけに、藁の芯の結び方、唱え言葉の内容など、市内でも様々なバリエーションが見られます。

藁の芯の結び方では、特に結び目の数のことを言わない所が多い中で、三回結ぶというのが数箇所で見られました。

また、結んだものを火にくべた時にパチンと音がしたら治るという所(尾小屋・観音下・河田館・草野・粟津など)が多く聞かれます。さらに興味深いのは、藁が身近な存在でなくなったためか、小松の平野部では「藁の芯」が、「糸」(荒木田・蓮代寺・小山田・津波倉など)、「紐」(里川・三谷・木場)、「蘭草」(矢崎)などに変化していることです。時代や環境の変化で俗信も内容を変えているわけです。

では、藁の芯や糸などを結ぶ時の唱え言葉を二例だけご紹介しましょう。

①エモライ エモライ ワリヤ ナニ ククル ウラ エモライ ククル ヒッククツテ キベル(松岡)

②オマエ ナンスル ワタシヤ エモライ ムスブ エモライ ムスブナラ シッカリ ムスベ(符津)

これら以外にも、集落によって微妙に異なる多くの唱え言葉が聞かれました。ここではこれ以上は紹介できませんが、これをご覧になって懐かしく思い出される方も多いことでしょう。

さて、この種の俗信のほかには、津上川・郷谷川・大杉谷川の上流部を中心に「ツゲの櫛を温めて麦粒腫にあてると治る」というのが聞かれました。分布域からみて、藁の芯を結んで……の俗信よりも古いものと考えられます。

連載
8

人の体と方言「麦粒腫」



符津町の皆さんから方言の聞きとり調査をする加藤先生(左)＝南部公民館で

メモライって共通語じゃないの？

今回は目に関係の深い〈麦粒腫〉を取り上げます。共通語ではモノモライと言いつ、瞼の縁に小さくぶつとできることのある腫れ物の呼称です。小松の皆さんにはモノモライよりもメモライと言った方が分かりやすいでしょうか。

こう書くと、「えーっ、メモライって共通

語じゃなかったの？」と驚く方がいるに違いありません。共通語形モノモライを普段耳にすることが少ない上に、北陸地方では福井県の北部から石川県の加賀・口能登地方、そして富山県と、広い範囲にメモライが分布しますので、てっきり共通語だと思い込んでいる人が多いのです。

では、これまでの調査(今夏の調査で小松市のほぼ全域の分布が見えてきました)から、小松ではメモライ以外にどんな〈麦粒腫〉の方言形が聞かれるかを見てみましょう。

まず、メモライと並んで、それからの音変化形と考えられるエモライ(イモライ・メモレ・メモリ・メモロー・イモリなども)が市内の広い範囲で聞かれます。

一方、大日川上流部の丸山には、ホッテ、それに隣接する大杉谷川上流部にはメブツ・メブツ・ネブツ・ネブツという形が聞かれました。これらはいずれも、舌の意の古語「陪堂」に由来するホイト・メボイトから変化した形と考えられ、メモライ以前の古い分布の名残だと思われる。ほかには、埴田・古府・平面でメチン

ボ・メチンボというのも聞かれました。

小松ではまだ聞いていませんが、〈麦粒腫〉ができた場合に、他人から何か品物をもらうと治るといった俗信が全国各地にあり、これが、共通語形モノモライやメボイト・メモライといった呼称を生んだと考えられています。

今回は、小松での〈麦粒腫〉の民間治療法(俗信)の分布について見てみたいと思います。

連載
10人の体と方言
〈つむじ〉〈旋毛〉

「この子のつむじはどこにあるのかな…」
外孫の中野秀星くんを抱く
田嶋輝雄さん・芳子さん夫妻（育成町）

〈つむじ〉と言うのは、一般に後頭部の頂上付近にある髪の毛の渦巻いた部分をさす共通語形です。「一目立たないもの」ようですが、渦が右巻きか左巻きか、頭部のどの辺にあるか、渦の数は一つか二つかなど、意外に注目されやすい身体部位の一つと言えます。

これまでの調査から、小松市内の〈つむじ〉の代表的方言形は、チリ、チジ、イジの

三つであることが分かりました。

チリは、津上川・郷谷川・大杉谷川流域や鍋谷川流域など市内東部の広い範囲に分布しています。チリという形は、小松だけでなく、すぐ北の辰口町・寺井町・川北町をはじめとする加賀地方から能登地方にまで分布する、石川県内の〈つむじ〉の方言形の代表とも言えるものです。チジは、チリの分布域の西に続いて、小松ハイパスとJR北陸線に囲まれた带状の地域と栗津を中心とした日用川流域・南の那谷・菩提・滝ヶ原などに、そしてイジは、安宅を中心とした日本海沿岸部に分布しています。

これらチリ、チジ、イジは音声的にも類似していて、おそらく最も広い分布を見せるチリが元の形で、チリからチジ、さらにチジからイジに変化したものと考えられます。

ほかには、大杉谷川上流部でズリ・ズイ・ズイダレといった方言形も聞かれました。また、ところどころで聞かれたズコは、本来頭頂部をさしていたものが、近い場所にある〈つむじ〉の方言形に転用され

たものでしょう。

ところで皆さんは〈つむじ〉の数や場所のことで何かおっしゃることはありますか？「〈つむじ〉が二つある人は意地悪な人」という話を小島・矢崎・栗津で、「〈つむじ〉が真ん中にある子は利口な子、横にある子は言うことを聞かない子（意地悪な子）」という話を古府・二ツ梨で伺いました。果たして心当たりのある読者はいらっしゃるでしょうか…。

連載
11人の体と方言
〈薬指〉〈小指〉

「ゆびきりげんまん」
平面町の平井愛子さんと孫の俊晃くん（小学2年生）
「昔は薬指はベンツキユビ、小指はコンチビと言うとったんね」

私たちにとって手の指は、日常生活でも身近な身体部位の一つであり、その呼称も比較的使用頻度の高いものです。しかもクスリユビを除く四本の指の呼称（共通語形）は、命名理由が理解しやすいこともあってか、全国的にもそれほど方言形は多くありません。特に〈親指〉〈人差し指〉〈小指〉は、全国の広い範囲にオヤユビ、ヒトサシユビ、コユビ（北陸地方では

コユビ以外の方言形も聞かれます）が分布し、〈中指〉も、近畿・中国・四国地方を中心にタカタカユビが分布するものの、そのほかの地方（石川県内全域を含む）はナカユビです。と言うわけで今回は、小松で共通語形と異なる呼称の聞かれる二本の指〈薬指〉と〈小指〉を取り上げます。

まず〈薬指〉では、市内全域に共通語形クスリユビが分布するほか、「最近はまだにしか言わない」「昔は言っていたが」といった説明つきで、女性を中心とした年輩の方々からベニサシユビ・ベンサシユビという方言形を広い範囲で聞くことができました。ベニサシ・ベンサシは「紅さし」で、かつて女性がこの指で唇に紅をさしたことに由来します。室町時代の終わりに京都で使われ始め、その後北陸を含む西日本全域に広がったものの名残です。素敵な名前ですが、〈薬指〉で紅をさすことをしなくなった今、ベニサシユビの名が忘れ去られようとしているのは仕方ないことでしょう。ちなみに共通語形クスリユビは、十三世紀ころ文獻に登場するクスシノユビ（クスシは薬師^{くすし}＝医者

意）が江戸時代に入ってクスシユビ↓クスリユビへと変化し、東日本に分布を広げたものです。

一方〈小指〉はと言うと、共通語形コユビとともに市内全域にコンチビ（カンチビとも）という方言形が分布します。コンチビの「チビ」が「小さい」意のチビを連想させるかわいい名前ですが、コユビの普及でこれもまた遠からず小松の方言から消え去る運命にあるようです。